

僕をたどる物語

倉橋政勝

## 僕をたどる物語

倉橋 政勝

僕は十年ほど前から明石の江井ヶ島に住んでいます。ちょうどその頃から「デブ」になりました。また、眠っている時に息が止まっていると妻に言われて病院で検査の結果、睡眠時無呼吸症候群と診断されました。以来、空気を自動で吸引できる装置をつけて寝ています。

そんな僕は、睡眠といえば：昔から眠りが浅いのか、夢をよく見ます。それも、しんどい仕事の夢が多いです。

就職したての頃はずっと暗室で印画紙を現像していたので、暗闇の中ひとりぼっちの夢をよく見ました。さらに：ある日、泊まりにきた友達の証言によれば、急に起き上がって夢遊病者の如く窓のカーテンを開けるようです。暗室には黒いカーテンがあって、それを何度も開け閉めするから、そんな行動をしていたみたいです。

大阪でデザインオフィスを経営していた頃は、ひたすら電話をかけ続ける夢：夢の中でプッ

シュボタンを押し間違えて苦悩する自分：

兵庫三田の運送会社に勤めていた頃の荷物を積んだり降ろしたりする夢もよく見ました。

数日前に見た夢は、新聞を配達している夢です。大阪での学生時代にずっと休みもなく朝夕刊を配り続けた日々：そして近年、辿り着いた博多での新聞販売店勤務：早起きが苦手な僕は、朝が早い新聞配達の仕事がやっぱり苦痛だったのでしょね。新聞を配っている夢は年に二・三回は見ます。

そんな夢を見た日は、いつもの何倍も働いたみたいでとっても疲れます。

仕事の夢だけではなく、いじめられていた幼い頃の夢も見ます。

小学校へ入学した頃は父と祖母と僕の三人で暮らしていました。究極の貧乏で、僕自身の見た目も粗末で、おまけにちくのう症のためずっと鼻水を垂らしていました。ついたあだ名は当然「ハナタレ」。学校ではそれを理由にいじめられる毎日でした。

でも、一方で面白い夢もあります。

教室が舞台で、僕はまだ高校生だったりするので。そのクラスメイトには成人した後に出会っ

た会社の同僚や、幼い頃に住んでいた近所のおばちゃんとかがいたりするのです。おばちゃん  
が、他の見覚えのある奴らと一緒にあって流行の話題とかに花を咲かせているのです。

最近ではその夢の中には、インターネットで出会った人とかも出てきて、リアルとバーチャル  
とが混ざり合い、わけのわからない状態なのですが、それでもなぜか夢にはきちんとしたストー  
リーがあるのです。僕もどういうわけか本気になって熱く語ったりもしています。そして、とっ  
ても人気者なのです。

夢の中には家族も登場します。今の妻も、子どもも。そして、昔の家族も。

父は、かなり前に他界したので夢に出る回数は少ないですが、母は、亡くなってからまだ数年  
しか経っていないからか、頻繁に登場します。

そもそも夢というものは自己中なものだから何でもありかもしれません。しかし、目覚めたと  
き現実に戻って、ふと寂しくなるのはどうしようもありません。

現実の世界では居住が定まらなく、何度も引越しを繰り返してきました。

古民家であったり、アパートやマンションであったり、そこそこの豪邸であったり、牛小屋みたいなところだったりと実に様々です。

そんな僕には：父と二人きりで過ごした時期と、母と二人きりで過ごした時期とがありました。

太平洋をのぞみ四国山脈を背にした雄大な自然に恵まれた土佐の高知。一九六三年（昭和三十一年）七月、僕はそこで生まれました。

土佐を代表する偉人である坂本龍馬の生誕地は、入学した高知市立第四小学校の目と鼻の先にあります。そこから南に少し行ったところに高知市の真ん中を流れる「鏡川」があり、同校の校歌にも登場する龍馬は、幼少の頃、その「鏡川」で遊泳していたといわれています。

実は、僕が小学生くらいの時にも（もう少し上流でしたが）「鏡川」には遊泳できる場所があり、夏休みには友達数人と毎日泳いでいました。

かなり前に他界した父との、「川」にまつわる思い出話があります。

父は、「四万十川」に並ぶ清流「仁淀川」の源流域である高知県高岡郡仁淀村（現〓仁淀川町）の出身です。その「仁淀川」の下流に吾川郡伊野町（現〓いの町）があります。伊野町は高知市の西隣に位置している和紙の町。伊野町内では、今や世界各国から注文があるほどの良質の土佐和紙が「仁淀川」の清流の恵みと、伝統的な工芸法によって作られています。ちなみに僕は伊野町にある高知県立伊野商業高校を卒業しています。

小学三年生から四年生の間は、高知市内のアパートで父と二人で暮らしていました。

父は川が好きでした。近くの「鏡川」にも、伊野町の「仁淀川」にも、よく連れて行ってくれました。

川が好きだった父ですが、ギャンブルも大好きでした。

とある休日「こどものくに（当時、高知にあった遊園地）へ行こう！」と誘われました。ところが「こどものくに」の隣の競輪場へおとなのくに」が目当てだった父は、結局、競輪場で所持金を全部使い果たし、晩飯をかうお金も無くなってしまいました。こうなれば、もはや「こどものくに」どころではありません。

仕方なく家に帰る際に父は突然、競輪場の前の「鏡川」の河原に下りて、石と石の間を覗き

込んだかと思えば、沢ガニを見つけ手づかみで捕獲し始めました。嫌がる僕の野球帽を奪い取り、凄まじいばかりにサバイバルの如く、大量の沢ガニを生け捕って野球帽の中に入れていく父……。その日の晩飯は、沢ガニの大盛り姿焼でした。沢ガニがうじゃうじゃと皿に盛り付けられた光景は異常なほど奇怪で、僕はそれ以来カニが苦手になりました。

サバイバルのような生活はその後まだまだ続きました。

「今度は、川ウナギを捕獲しよう！」

…そんな父のことです。予想通り大量のウナギが、しばらく食卓に続きました。いくら栄養があるといっても毎日ウナギでは……。でも、ウナギは今でも好物です。

父は大工でした。父が大工として建てた家は高知県内でいくつか現存しています。僕も一時期父のような大工になるのに憧れましたが、結局はその道には進みませんでした。

仕事となれば一所懸命な父であり、普段は優しくて大好きでした。ただ酒を飲むと途端に人が変わったようになる父。大人になってそんな父のような酒の飲み方はしたくないという気持ち僕にはありました。というか、大人になっても自分は絶対に酒を飲まないでいようと思いました。

一九七三年（昭和四十八年）十二月十一日。その日は南国土佐といえども冬の曇り空でかなり肌寒さが身にしみる感じでした。

学校から帰宅すると今日も父は仕事に行かず、酒を浴びて酔っ払っていました。でも、いつもの飲んでいる時とはなんだか様子が違っていて、なぜか父は泣いているのです。

しばらくして、午後四時ごろだったと思います。涙目のままの父は突然僕に言いました。

「おんちゃんを呼んでこい」

近くの鮮魚店で働いている叔父を今すぐ家に連れてこいというのです。

当時、家に電話があったかどうかは覚えていませんが、電話があったとしても父がこんな状態なので支払いが滞り通話ができなかったのでしょうか。はっきりとしたことはわかりませんが、電話で叔父を呼ぶという選択肢はなく、僕は歩いて叔父の店へと向かいました。

しかし、少し歩いたところでだんだんと父の様子が気になり、引き返したのです。

夕暮れ時が近づき、あまり陽が差さないアパートの部屋はもう薄暗く、その中に父はさっきと同じ場所にいました。でも、座っているのではなく立っている状態でしたのです。

父は、頭がうなだれていて全く動かない感じでした。床に足はついていましたが、その父の首にはこたつのコードが巻かれ、片方の先は天井の電球線の部分に繋がっていました。

この数日前、酒を飲んでいない父は笑顔で僕に言いました。

「クリスマスには自転車を買っちゃるき、楽しみにしちゃれや」

その約束を果たすこともなく、父は突然この世を去ったのです。

それから何かあることに「鏡川」に行っては水面を見つめる日々。

シヨックでいっぱい落ち込んだ気持ち癒し続けてくれた川。

しかしその川は時としてその周辺に住む人々の日常生活を傷つけたりもしました。台風銀座高知には、毎年シーズンになると大型の台風が襲来します。雨風はもとより、「鏡川」の氾濫・洪水という恐ろしい状況を幾度となく体験しました。「こどものくに」も台風災害のためになくなってしまいました。

それから近年に至るまで「鏡川」は、堤防工事などの開発が急ピッチで進み、遊泳場や沢ガニとかウナギとか獲った場所も、いつの間にか消えてしまいました。父と一緒に過ごした川の面影はまったくありません。

「鏡川」は浦戸湾に流れ出て、やがて広大な太平洋にそがれるために、昔と同じ方向へ今でもゆっくと流れています。

父の死後、すぐに僕の前に現れたのは、離婚はしていなかったものずっと高知で別居状態だった母です。

父と母が別れた理由はよくわかりません。物心ついた頃には母は家にはいませんでした。

保育園への送り迎えも、小学校の入学式も授業参観も、いつも僕の面倒を見てくれたのは祖母だったのです。

母は若い頃からダンボールを製作する紙工所に勤めていました。

結局、モノを作るといふ仕事に進んだ点では、僕は両親と共通しているようにも思えます

そんな母との二人暮らしが始まりました。

家において母の前では問題はありませんでしたが、学校では荒れました。

以前に自分をいじめていた相手への報復はもちろん、何か自分の都合の悪いことがあれば暴れ出し、気に入らない級友を次から次へと殴り、腹が立てば校舎の窓ガラスに石を投げて割るなど、授業を中断するような行動を取るのは日常茶飯事で、高知市立第四小学校開校以来最悪の問題児とまで言われました。

病院で脳波の検査をさせられたり、カウンセラーっぽい人が現れて尋問されたりで、また少しでも何かあるごとに学校から職場に連絡が入るのか、仕事から帰宅して僕の顔を見るたびに母はいつも泣いていました。

先生や親戚から環境を変えたらいいのではないかなどという提案があったかどうかは定かではありませんが、五年生に進級すると同時に、母の母校でもあり、児童の多いマンモス校であった隣の旭小学校へ転校することになりました。

今でもはっきり覚えていますが、ちょうど第四小学校から旭小学校に移動されて たまたま五年生の他のクラスの担任の女性の先生がおられて

「あんた、他の子と変わらん。まったく普通の子やんか」

そう話しかけてきてこられた時に、すごく楽になって、たったこれだけのことがきっかけですが、本当に不思議なもので、転校してからの学校生活は、かなり落ち着いたように記憶しています。

父があのような形で他界する二年前の小学二年生だった頃にただ一度だけ父と母と三人で暮らした時期があります。その場所というのが、空前の大ヒットを記録した映画「君の名は。」のイ

メージであるという聖地（ロケ地）飛驒古川（※旧 岐阜県吉城郡古川町／※現 岐阜県飛驒市古川町）の南隣りに位置する国府町（現 高山市に合併）でした。

幼少時から中学までは、飛驒で事業を営んでいた伯母（父の姉）の計らいもあって、何度か高知と飛驒を行ったり来たりする少年期でした。

その中でも、父と母と僕の家族三人で暮らした一年にも満たない日々が、今までで一番幸せだったと素直に思います。

中学進学を目前にした頃に、飛驒から伯母がやってきて僕を引き取りたいと言ってきました。

伯母は飛驒の天然石をアクセサリなどに加工する会社を経営していました。岐阜県飛驒市（旧 吉城郡古川町）と岐阜県高山市（旧 吉城郡国府町）との、ちょうど境界標示のある国道41号線沿いに伯母の家と会社事務所と工場がありました。「株式会社 飛驒菊紋石」といいますが、残念ながら現存していません。Googleのストリートビューで確認すれば、今は草木が生い茂っている空き地になっています。

母と伯母との話し合いの結果、条件などいろいろあったとは思いますが、高知の旭小学校を卒

業後、母のもとを離れ岐阜へ行くことになりました。保育園年中時と小学二年生以来の三度目の飛騨での生活が始まりました。伯母の家で従兄らと共に生活することになり、古川中学校に入學しました。そこで野球部に入りました。

ここに住んでいた当時のこの周辺は田んぼと畑ばかりで、工場の裏から少しのところ宮川が流れていました。宮川は公害病のイタイイタイ病で問題となった神通川の支流で、高山市に編入された旧大野郡宮村が源です。

中学校への通学は、野球部の練習等の時間の都合でスクールバスか自転車のどちらかでしたが、自転車での帰り道、天候条件が良ければ、宮川の堤防沿いから北アルプスの高い山々を望むことができて、僕はその風景が好きだったので、バスよりも自転車で通学することが多かったように思えます。

二十世紀の終わり頃に、国道41号線の国府古川バイパスが開通してからは、近くに大型ショッピングセンターなどもオープンしたこともあって、当時の面影はほとんど残っていないような感じでした。

飛騨では何不自由のない中学校生活を送りました。小学生時代に荒れていたのとは逆で学校生活は問題なかったのですが、家での従兄との些細なトラブルが引き金となり、結果的には二年の

夏休みに高知の母のもとへ帰ることになりました。

野球部では背番号「3」付きのユニフォームを着た記念写真が現存しますが、岐阜県内での野球の大会には出場経験がありません。

その後は、一九七九年の高校一年の夏に友達と、一九八五年の日航ジャンボ機が墜落したその日と、一九九〇年の従姉と同級生の結婚式の時と、二〇〇〇年の秋の信州木島平に住んでいた当時にふらっと訪ねて以来、もう何年も飛驒には行っていません。

母が家を出て、父と祖母と僕の三人で暮らしていた時に祖母を引き取り、祖母に不自由のない生活をと考えていた伯母でしたが、それから間もなくして祖母は認知症になり、最終的には寝たきりで生涯を終えています。

飛驒に僕ら家族を招いて父の仕事と住まいを用意してくれたのも伯母。しかし、幸せな生活は一年も続きませんでした。

そして、中学生の僕も伯母の期待に応えることができませんでした。

伯母自身もその後の事業が順調には進まず飛驒を離れ、現在は伯母の一家全員が、すぐに会え

る距離（神戸鈴蘭台）に住んでいるというのが不思議です。

僕は今でもずっと伯母のことが大好きなので、決して悪く書いているつもりはありません。結果がこうなったというだけです。

かなり後になって、この当時の母の胸の内を知ることができたのですが、荒れていた僕を普通の少年に更生させた母には、僕を一人前に育てるという自信があったようで、僕が母のもとを離れ、飛驒へ行くと決めた時は、かなり悔しかったそうです。

とにかく、岐阜から高知へ出戻り、母との生活が再開しました。

それからすぐに、母は閑静な住宅地にあるガレージ付きの家を借り、そして、念願だった喫茶店を高知市内でオープンしました。土佐電鉄の螢橋という電停前にあった「りぼん」という名の喫茶店です。そして知人からマルチーズを譲ってもらい飼いはじめました。女の子で「サリー」という名の犬です。

僕は二学期から高知の西部中学校に通い始めました。クラスには小学校の仲の良かった友達がいっぱいいて、すぐに新生活にも慣れました。体育祭では団長にも選ばれました。もちろん野球が

部に入りました。すぐに背番号をもらって大会にも出場できました。背番号をユニフォームの背中に縫ってくれていた時の嬉しそうな母の顔を今でも覚えています。

母子家庭だったけれども、今思えばこの頃が本当に楽しい時期だったように思います。そして、僕が高校を卒業するまで楽しい日々は続いたのです。

母は、僕が高校を卒業したらそのまま高知での就職を強く望んでいました。

しかし、親不孝な僕はその期待に応えることができませんでした。

高知で魚屋を今も現役でやっている叔父がいます。父の弟で中学を卒業してからずっと今も同じ店で魚をさばき続けています。

父が自らの命を絶つ際に「おんちゃんを呼んでこい」と言った「おんちゃん」とは、この叔父のことです。叔父は父とは正反対で、父のように酒に吞まれることもなくいつも働いている印象があります。

小さい頃、その叔父と同居している時期があったのですが、夜九時前には寝て、朝も三時過ぎには市場へ出かける叔父を愛に思ったりして、叔父のような仕事なんて絶対にしたくないと思っ

たりもして多少反発していました。

でも、叔父には趣味があって、それがなんと風景画の油絵。惹き込まれるようなすごい絵を何枚も描いていました。そして、いくつも賞をとっていました。僕が絵を好きになってこの道を志すきっかけになったのは実は叔父の影響だったのです。

たしか中学生の頃、叔父になぜ画家を志さなかったのか訪ねたことがあります。

「画家になるがらは、よっぽどの才能が無いとなれんき。

それに、早う稼ぐにはちゃんとした仕事がい。

おんちゃんには魚屋が似おうちゅう」

そう笑いながら答えが返ってきたので、なんか微妙に腹立たしい気持ちになってますます叔父には反発したりもしました。

当時、高知にいても自分が望んでいる仕事に就けそうもないような気がしていたので、叔父の絵に負けないような絵を描くイラストレーターになりたいなとずっと思っていたこともあり、高卒後は進学を決めていました。

大阪のデザイン専門学校への進学希望だったのですが、母は進学を反対していましたし、当然入学金を払えるほど経済的な余裕はないので、そこで新聞奨学生という道を選びました。新聞奨学制度とは入学金を含む学費を新聞社が肩代わりする代わりに、在学中新聞配達業務を行うというものです。

結局、母の気持ちなどまったくもって感じることもなく、ただ自分勝手に進路を決めてしまいました。

大阪到着後すぐに滋賀へ移動。そこでの研修終了後、大阪港区の新聞専売所に配属となり、朝夕刊の配達と折り込みの作業に従事し、梅田のデザイン専門学校へ通う日々が始まりました。

港区の専売所の二階に住み始めてから、学校にも仕事にも慣れてはきましたが、そこでの問題は過剰な労働時間。本来は奨学生が行う必要のない集金や新聞読者の拡張業務までもさせられることになり、学校どころではありませんでした。

そんな折、母が大阪の友達のところへ遊びに来たそのついでに僕の住んでいた専売所を訪ねて来ました。本当のところは友達に会うのがついでで、僕の様子を見にくるのが真の目的だったの

かもしれません。その時、六畳の部屋の真ん中を隣の小さな物音だけでも響くような薄いベニア板で半分仕切った狭い空間に、ベッドとみかん箱ぐらいの机だけが置かれた僕の部屋を見た母は、瞬間的に物凄く腹を立てていました。

その後、新聞社奨学会事務局の偉い人の計らいで東淀川区の専売所に移ったのですが、新聞社の本社へ通報したのは母だったのです。港区の専売所を引き上げる際、専売所の所長らその家族たちからの恨み節を耳にし、まだ十八歳そこそこの自分としては耐えるのが必死でした。でも、あのまま港区の専売所にいたら、夢も希望もない生活を過ごしていたことでしょう。

そんなこともあって、同じ新聞奨学生として専門学校に入学した同期の仲間たちが、卒業はおろか途中から学校にも来なくなるのを尻目に、ただ自分だけは、母の思いに応えるためにも絶対にやり遂げなければという一心での二年間でした。

一九八四年（昭和五十九年）、新聞畑にいて毎日のように折り込みのチラシ広告を目にしていたこともあって、当初の希望だったイラストレーターから広告制作へと興味が移り、アドバタイジングを専攻していたので、専門学校卒業後の就職先は広告制作会社に決まっていました。

新聞専売所に三月いっぱい勤務した関係で、入社日までの期間が短く、まだ住処が決まってい

ない状態でした。でも、就職先の社長がとてもいい人で、僕の住めるアパートを一緒に探してくれました。

入社後も社長は何度かご自宅に僕を招いてくれました。僕の母校である伊野商業高校がセンバツに出場しPL学園を敗って決勝に進出したのですが、帝京高校との決勝戦を社長と一緒に甲子園球場へ観に行きました。

やがて、その会社で出会った女性と結婚しました。子どもが出来ました。豊中のアパートから池田の一戸建てに移り住みました。

結婚後も複数のデザイン会社を渡り歩き、スキルを磨きました。言うまでもなく、パソコンもなくほとんど手作りだった時代と、コンピュータグラフィックが当たり前の現在の制作環境との両方を経験した世代です。

阪神淡路大震災の翌年の一九九六年（平成八年）に義父の協力などもあって大阪のど真ん中でデザインオフィスを開業しました。

世の中はインターネット時代に突入するまさにその時で、今をときめく人物たちとの交流もありました。

人生の中で一番絶好調でした。ただ、有頂天にもなり過ぎていました。

一瞬で、仕事も家族も友人も せっかく築いてきた信頼をもすべてを無くしてしまうことになりました。他人を信じて、たった一つの書類にサインをしてしまったがために…。

一九九九年、まさに世紀末。母から勘当されました。

中学か高校の卒業文集に「将来は平凡な家庭を築きたい」と書いたことを記憶していますが、今思ってみれば、間違いなく平凡な家庭を築けて幸せな人生を保証されるような環境であったのに、全て自分自身で潰してしまったというような感じでしょうか。

「誰の期待にも応えられなかった。一番悪いのは自分や」

大阪のデザインオフィスを潰したあと、流れのまま上海、博多、信州と彷徨い、兵庫県三田市の山間にある運送会社に就職したのが二〇〇〇年（平成十二年）の十二月。それから、二〇〇五年（平成十七年）の十二月まで丸五年間、そこでトラックの運転手をやっておりました。

当時、運送会社の社長は、僕よりもひとまわり以上年下の二十歳そこそこの若者でした。僕が入社する数年前の一九九七年（平成九年）、社長は高校を卒業後、すぐにこの運送会社を設立したと聞きます。

当初は実業家の父親の協力があつたとはいえ、三十人を超える運転手を雇用、一般貨物運送業を主軸とし、近畿一円から四国・中国・九州・中部・関東まで幅広いエリアでの運搬物を取り扱い、その後もたびたびの経営的な危機や苦難をも乗り越えつつ会社の発展を担ってきました。

山奥に社員寮を構えているので、何らかの事情で職や住を失った人々など、いろんな経歴の持ち主が流れ着いて来るのもこの会社の特徴でした。そういった人材を上手く使いつつ、適材適所に人員を配置し、異業種からの情報を多く収集したりも出来ていたと言えます。

僕もその例外ではなく、社員寮のあるこの会社は魅力でした。

ただ、入社した時に誓ったことがあります。それは「真のプロのトラックドライバーになる」ということ。その思いもあってか、入社半年後には北海道へトラック輸送するなど様々な運送業務を経験し、運転手の傍ら事務や配車係も兼任するに至りました。

中でも宅配荷物を集荷する業務は三ヶ月位の期間したように記憶しています。ひとことに宅配と言っても一般家庭に届けられる荷物は少なく、大半が業務用の荷物でした。重い原液が詰まっ

たドラム缶や自動車エンジンやキャタピラとか建築用資材などなど。

当然、日によって荷物の量が違うので、積載方法には工夫が必要です。積載不能であれば一旦三田の会社に帰って降ろした後に、もう一度撰津まで積みに行かねばなりません。さらに集荷が遅れば、早朝に出勤して来て宅配を担当する運転手たちに迷惑がかかります。だからと言って、応援に他のトラックを呼ぶなどというのは不可能でした。

フォークリフトやブラッター（リーチ型バッテリーフォークリフト）などの操作は上手くなりましたが、そうなるまでに荷物や建造物損壊（壁を壊す）などの物損事故もしたことがあります。深夜ということもあり道は空いていますが、油断は出来ません。ちょっとした気の緩みが事故に繋がるのです。東の空が白みかかる六甲アイランドの埠頭で集荷前の二時間ほど、トラックの車内で仮眠をとるのが至福のひとつでした。

また、材木運搬の業務では、舞鶴自動車道を走行中、パトロール車両に呼び止められ、福知山インターのカンカン場でトラックの重量を検量されました。（カンカンというのは負担重量のことを指し、それを計る場所のことをカンカン場といいます。その由来は「貫（かん）を看（み）る」、つまり「看貫（かんかん）」からきているそうです。）

検査結果は最大積載量の二倍超え……かなり悪質な過積載でした。過積載の責任は荷主にあるのか運転手にあるのかでもめましたが、実際に運転手に減点と罰金が課せられるわけですから、言い争ったところでどうしようありません。荷物の積み過ぎによる悲惨な重大事故も現実によく発生しているわけですし、トラック運転手が荷物に責任を持つのは重量の面においても当然のことなのです。

運送業務とは荷主の要望に最大限応え、確実に安全に納品すること。今振り返ってみれば、運送業務について根本的に考えることの出来た業務であったと思えます。

そしてそれが、生まれて初めての道路交通法違反でした。

既にトラックをおりてから十年を超える現在でも、これらの運送業の経験があったからこそ今があると言っても過言ではありません。

体重が50kgそこそしかなく筋肉質な体型であった当時とは大違いの「デブ」に様変わりした僕とは違って、その運送業一筋の一代目社長は今でもずっとかっこよく、運送会社はもちろん健在で優秀なプロのドライバーが人々の大切なモノを運んでいます。

二〇〇四年（平成十六年）にインターネットのサイトを通して明るい女性と知り合いました。それが今の妻です。お互い再婚でした。これぞ、インターネットの恩恵です。新たな家族と一緒に高知に帰り、勘当されていた母と再会することができました。

しかし、これから皆でまた楽しい日々が始まると思っていた矢先に母は乳がんを患い手術しました。その後も入院を繰り返しました。

数年後の東日本大震災の発生した二〇一一年（平成二十三年）五月には、運送会社の社長夫婦と僕たちの家族と一緒に高知へ行きました。

知人宅で従兄弟らを変えて宴会を行い、母も大喜びでした。

それから数ヶ月後、母は自宅アパートで座椅子に腰をかけたテレビを観ながらの状態で亡くなっているのを、様子を伺いに来た母の友人が見つけました。

死亡推定時刻は二〇一一年（平成二十三年）十一月二日の夜です。

奇しくもこの原稿の提出締切日が十一月二日で、つい先日高知で墓参りをして来たところです。

伯父夫婦（母の兄とその妻）の隣に墓を建ててくれという生前の母の希望で、僕の両親の墓は別々のところにあります。高知へ帰って来たら必ず両方のお墓まいりということで、本当は今住んでいる明石に建てようかと思ったりもしましたが、でもやはり母の生まれ育ったところが一番です。

遠く離れていても、月に一回は必ず従弟が、隣の伯父の墓参りの際に掃除などをしてくれるのでありがたいです。

一方の父の墓は先祖代々の墓で祖父母たちも納められています。その場所は魚屋の叔父の自宅近くにあり、叔父の子らもずっと高知を離れずに住んでいるのでこれからも安心です。

母に抱かれている写真を撮ったのは、たぶん父だと思えます。

そして、父に抱かれている写真を撮ったのは、たぶん母だと思えます。

以下は、僕が今までに住んだところです。

- 一九六三年 高知市上町二丁目
- 一九六八年 岐阜県吉城郡古川町（現〓飛驒市）
- 一九六九年 高知市上町二丁目
- 一九七〇年 高知市上町五丁目
- 一九七一年 岐阜県吉城郡国府町（現〓高山市）
- 一九七二年 高知市上町五丁目
- 一九七三年 高知市旭町二丁目
- 一九七四年 高知市上本宮町
- 一九七六年 岐阜県吉城郡古川町（現〓飛驒市）
- 一九七七年 高知市上本宮町
- 一九七八年 高知市佐々木町
- 一九八二年 大阪市港区磯路
- 一九八二年 大阪市東淀川区東中島
- 一九八四年 大阪市都島区中野町



- 一九八九年 大阪府豊中市永楽荘
- 一九九二年 大阪府池田市木部町
- 一九九五年 兵庫県川西市鶯が丘
- 一九九九年 大阪市中央区南船場
- 二〇〇〇年 大阪市西成区玉出中
- 二〇〇〇年 中華人民共和国上海市
- 二〇〇〇年 福岡市南区老司
- 二〇〇〇年 長野県下高井郡山ノ内町
- 二〇〇〇年 長野県下高井郡木島平村
- 二〇〇〇年 神戸市北区八多町吉尾
- 二〇〇二年 兵庫県西宮市山口町名来
- 二〇〇三年 兵庫県三田市小野
- 二〇〇四年 兵庫県三田市乙原矢口
- 二〇〇五年 兵庫県明石市大久保町江井島



明石の江井ヶ島に住んで 既に十年を超えました。

完成した母の墓に遺骨を納めた後、ふたたびデザイン業を営むことを決めて、明石の江井ヶ島の地で開業し、今日に至っております。

二〇〇〇年に上海や福岡、信州などを転々としていた時代には「放浪するは我が人生」と言い続けていましたが、今はもうそれは当てはまりません。

これまで支えてくださった皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。



Cubs Publishing

僕をたどる物語

倉橋 政勝

発行

カブス出版

〒六七四―〇〇五七

明石市大久保町高丘七―二六―八

印刷

有限会社木下ブンセイ出版印刷

〒六七四―〇〇八二

兵庫県明石市魚住町中尾三〇六番地

TEL 〇七八(九四八) 三七七一